

## 論文審査の結果の要旨

氏名：小 谷 喜 久 江

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩

—孝と自我の狭間で—

審査委員：（主 査） 教授 小田切 文 洋

（副 査） 教授 松 岡 直 美 教授 高 綱 博 文

### 1. 本論文の目的

本論文の目的は、江戸の後期女性漢詩人と高い評価を得ながらも必ずしも研究が進展しているとはいえない原采蘋の生涯を俯瞰しながら、隠された内面の葛藤を詩と日記から読み取ろうとしたものである。原采蘋の詩や日記は写本で伝わるがそのほとんどが翻刻されておらず採蘋研究は原資料の整理からまず始めなければならない。『東遊日記』『東遊漫草』『西遊日歴』を中心に写本の解読を進めながら、詩から読み取れる採蘋の心情や背景にある人的な交流など原采蘋の全体像を明らかにするための基礎作業が行われている。

### 2. 本論文の構成

#### 序章

1 節 本研究の目的

4 節 新研究における考察視点

2 節 先行研究

5 節 各章の説明

3 節 新研究の位置づけ

#### 第 I 章 江戸詩風の変遷と地方詩壇の状況

一節 江戸詩壇の変遷

1-1 古文辞派の終焉

1-3 江湖詩社の活躍

1-2 江湖詩社の清新性霊説の受容

1-4 菊池五山の『五山堂詩話』の出版

二節 長崎来航清国人との交流

2-1 草場珮川と長崎

2-5 梁川星巖・紅蘭と長崎

2-2 市河寛斎と長崎

2-6 広瀬淡窓と長崎

2-3 頼杏坪と長崎

2-7 田上菊舎と長崎

2-4 頼山陽と長崎

三節 女性漢詩人の輩出

3-1 袁枚の影響

(1) 袁枚について

(3) 『随園女弟子選』にみる女弟子の実像

(2) 袁枚の詩論と女性観

(4) 頼山陽の女弟子

3-2 袁枚の女弟子と江戸の女弟子の違い

四節 九州詩壇の動向—福岡藩と秋月藩を中心に—

4-1 福岡藩の藩学

4-4 九州詩壇の動向

4-2 秋月藩の藩学

4-5 亀井学と江戸詩壇

4-3 寛政異学の禁の余波

#### 第 II 章

一節 亀井小琴との交流

1-1 原家と亀井家

1-3 儒者の娘—小琴の場合—

1-2 儒者の娘—采蘋の場合—

1-4 采蘋と小琴—異なる人生の選択

二節 父古処の願望

2-1 古処の手紙

三節 秋月藩の政変

四節 婚約の破綻

第三章 漢詩人としての修業時代	
一節 父母との遊歴	四節 初期の作品—自筆詩稿を巡って
1-1 遊歴	五節 「有煒楼詩稿」について
1-2 父母との遊歴と采蘋の評判	六節 采蘋の詩風
二節 漢詩人としての決意	6-1 父の影響
三節 佐賀・長崎における評判	6-2 李白の影響
第四章 遊歴詩人としての出発	
一節 京都への旅	
1-1 出郷の動機	1-4 菅茶山との出会い
1-2 別れの挨拶	1-5 一年半の京都滞在と父の死
1-3 諸葛孔明との比較	
二節 江戸への旅立ち	
2-1 「東遊日記」について	
2-2 「東遊日記」に見る中国地方の文人たちとの交流	
(1)兄弟に別れを告げる	(4)広島での二ヶ月
(2)琴を孝ぶ	(5)広瀬旭荘との再会と頼杏坪と会遇
(3)相思の詩	(6)「東遊日記」の旅程図
三節 京都の再遊	
第五章 江戸での二十年間	
一節 江戸における交友関係	
二節 羽倉簡堂との交流	
三節 江戸における采蘋の名声	
四節 江戸客中の詩と秋月藩への上書	
4-1 江戸客中の詩	
4-2 秋月藩への上書	
(1)井上参政への上書	(2)藩主への上書
第六章 房総遊歴	
一節 幕末房総地方の文化的状況	
二節 「東遊漫草」にみる房総文人との交流	
2-1 江戸文人と房総文人との交流	2-4 人名録について
2-2 「東遊漫草」について	2-5 旅程図
2-3 「東遊漫草」の詩と訪問先	
三節 房総における采蘋の足跡	
第七章 帰郷	
一節 帰京後の采蘋	
1-1 幕末の山家の状況	1-3 「戸原卯橘日記」に見る山家時代の采蘋
1-2 「宜宜堂」の開塾	
二節 肥薩遊歴	
2-1 「西遊日歴」について	2-3 「漫遊日歴」について
2-2 日記に見る肥薩遊歴出発の状況	2-4 肥薩遊歴の旅程図
三節 最後の出郷	
3-1 萩での二ヶ月	3-2 萩における終焉
第八章 終章	
一節 采蘋にとっての「孝」	
1-1 父に対する孝心	1-3 父母兄弟の墓の整備
1-2 母への孝養	1-4 父の遺稿の上木
二節 采蘋のジェンダー意識	
2-1 「爲阿源」にみるジェンダー意識	2-3 「漫遊」に見る政治への関心
2-2 「讀南汎録」にみるジェンダー意識	2-4 上書に見る経済への関心

### 三節 采蘋の自我意識

#### 3-1 采蘋の恋愛にみる自我意識

#### 3-3 駿府の石上氏との恋愛

#### 3-2 馬関・広島での恋愛

### 四節 漢詩人としての原采蘋

#### 4-1 男性文人の評価

#### 4-3 近代への架橋

#### 4-2 江馬細香・梁川紅蘭・原采蘋の漢詩人としての意識の違い

#### 原資料・参考文献

## 3. 本論文の概要

序章では、原采蘋についての先行研究を評価位置づけながら、新研究が何を指すのかが提示されている。采蘋漫遊の記録であり詩集も兼ねる「東遊日記」「有煒楼日記」「東遊漫草」「西遊日歴」「漫遊日歴」の五資料の解説を進め、その日常生活を再現するとともに采蘋の心情を明らかにするのが本研究の目的とする。さらに采蘋の手紙や書類なども合わせて采蘋のジェンダー意識の理解に近づくことも本研究の課題であるとしている。

第I章では、采蘋が漢詩人として活躍した時代背景として、江戸後期の中央や地方の漢詩壇の状況を明らかにしている。江戸時代、長崎は清国人との交流も含めて中国文化を最も身近に感ずることができる場であった。頼山陽を始めとした漢詩人の長崎遊歴がどのような意味を持っていたかがまず検討されている。続いて江戸後期女性漢詩人が出現するのに大きな影響を与えた袁枚と女弟子について考察されている。頼山陽など女弟子への指導法や『随園女弟子詩選』の和刻本にみる女弟子への評価などから、袁枚とその女弟子との間にあった知的で開放的な関係とは違って日本の男性詩人は女性らしさを求めたり、女弟子に一定範囲のものしか求めなかったことが明らかにされている。

第II章では、采蘋の少女時代、婚約破棄を経験する十六歳の頃までが検討されている。亀井昭陽の娘小琴との交流とそれぞれの人生の選択から見えてくる二人の違う生き方が対比されている。江戸在勤中の父古処からの手紙は手習いを奨励する内容であるが、文面からは御殿奉公する女性の見聞など、江戸では才能さえあれば女性でも出世の可能性があることを説くものであった。順調に少女時代を送っていた原采蘋に父古処の失脚と自身の婚約の破談という思いがけない事態が訪れる。

第III章では、秋月藩の重職を解任された父古処は、漢詩人として生きることを宣言し、十八歳の采蘋を伴い遊歴の旅に出る。遊歴を通して、采蘋は漢詩人となるべき修行を続ける。長崎の遊歴は、その修行の集大成ともいえるものであった。修業時代の作品を集めたものとして自筆詩稿(表紙には「采蘋女子遺稿」)や「有煒楼詩稿」が残されている。采蘋の詩風の形成を考える上で重要な資料である。采蘋の詩風を考えたとき、父古処と李白からの影響が重要だと指摘されている。

第IV章では、父古処との修行の旅を終えると、専門詩人として独立するため采蘋は京へ旅立つ。その途上で菅茶山と出会うなどいくつかの成果があった。父の病気のため最終的に目指していた江戸行きをあきらめ、帰郷した采蘋に父は「不許無名入故城」の遺言を残す。この言葉が采蘋の生涯を左右することになる。再度、江戸を目指しての旅立ちについては「東遊日記」が残されている。詩集を兼ねるこの日記を翻刻しながら、その旅程や交流した人物が詳細に考察されている。訓読された詩からは采蘋の心情を読み取ることができる。

第V章では、江戸における二十年間を考察されている。江戸時代の采蘋を知る資料は采蘋側のものは数少ないが、采蘋と交流した文人の残した資料も利用することにより、采蘋の江戸での生活をかなり明らかにすることができる。采蘋の文章は、江戸滞在時代に書かれたものが多く、采蘋の思想を考える上で重要であると指摘する。なかでも井上参政と藩主への上書には、円熟期に入った采蘋の自信の一方で女性ゆえの苦悩が表現されている。

第VI章では、江戸在住時代の采蘋の二度の房総遊歴が、房総の文人とのネットワークを背景にしたものであったことが分析されている。二度目の遊歴については「東遊漫草」が記録として残されている。「漫草」を手がかりに、房総における采蘋の足跡を克明に跡づけるとともに詩の贈答を通して房総の文人との交流が明らかにされている。

第VII章では、志半ばで帰郷を余儀なくされた采蘋の帰郷後の生活が検討されている。采蘋の山家時代の動向を知る資料として、「戸原卯橘日記」がまず紹介されている。原家の墓所を建て直す資金を得るため、采蘋は肥薩遊歴をするが、その記録が「西遊日歴」と「漫遊日歴」である。「西遊日歴」は三百首あまりの詩で構成されている。「漫遊日歴」は、詩を含まない日常の簡単な記録である。「漫遊日

歴」は、「西遊日歴」の詩を理解するのに参考となるのでその全文が翻刻されていて、貴重な資料となっている。二年を越える肥薩遊歴を終えた後、父の遺言を実現するため再び出郷するが、萩で病を得て亡くなる。采蘋の葬儀や死後の後始末をした土屋蕭海の手紙を中心に采蘋の死の前後の状況が詳細に検討されている。

第Ⅷ章では、結論として、原采蘋の孝の意識と、それに反する自我の意識、その間に窺えるジェンダー意識を総合的にまとめている。采蘋の自我とジェンダーの意識を考える時に重要なのは二つの恋愛事件である。二つの恋愛事件を検討することから、采蘋の女性としての素直な心情を知ることができると指摘する。天性優れた漢詩人であった采蘋が女性として自分を受け入れるまでには長い時間がかかったと最後にまとめている。

#### 4. 本論文の意義と評価

本論文の意義は、第一に重要な女性漢詩人として評価されながらも、伝記研究が進んでいるとは必ずしもいえない原采蘋について、主に三つの遊歴日記の分析を通してその伝記的事実が分析されている点である。なかでも「東遊日記」と「東遊漫草」については、その旅程、訪問地、訪問者まで克明に跡づけられている。これまで不明の点が多かった江戸滞在時代についても、周辺資料の活用によってかなりのところまで明らかにされている。遊歴中に詠まれた采蘋の詩も伝記資料として重要である。詩の解説は伝記研究の上で重要であるばかりでなく、采蘋の文学を評価するためにも欠かせない作業になる。本論文では、引用の全詩に訓読を付しているが、これからの本格的な解説に向けての基礎作業として評価することができる。

第二に評価されるのは、これは伝記研究では当たり前だが意外に疎かにされている原資料の徹底調査である。本論文では、五つの機関が所蔵する21点の遺稿が一番の基本資料として提示されている。また、先行研究も丹念に跡付けられていて、伝記研究に欠かせない資料類に限なく網羅されている点も評価できる。本論文の最終目的は、孝と自我に揺れる原采蘋の内面世界を読み解くことにあるが、性急に結論を急がず一つ一つの資料を丁寧に読み解きながら結論を導いている点は好感が持てる。

#### 5. 今後の課題

原采蘋の遺稿は、本論文の一覧にあるように、大正時代の翻刻を別にするると、21点ある。内容的に重なるものもあるが、かなりの数である。采蘋の残した漢詩も五百首を越える。その解説を今後とも進めなければならない。漢詩はいろいろな約束があり、また特有の表現もある。一見固い漢詩の表現の中から作者の肉声を聞き分けていくのはかなり難しい作業になると思われる。本論文での三つの遊歴日記の分析はかなりの成果を挙げたものと評価できるが、この研究を基礎にして小谷氏にはさらに他の遺稿にも取り組まれ原采蘋の漢詩人としての才能やその生涯の意義を明らかにしていくことが望まれる。

原采蘋は当時としてもかなり特異な生涯を送った女性と思われるが、その特異さをより明確するためにも当時の一般的な事例との比較も必要になってくるかと思われる。本論文で儒教が江戸の女性の生き方の枷となっていたことが論述されているが、儒教がどこまで当時の社会に浸透していたかなど慎重な判断が求められるだろう。

以上、本論文は、まだ翻刻されていない原采蘋の遺稿を中心に生涯のそれぞれの時期の伝記的事実を掘り起こした内容となっている。日記と詩の解説を通して采蘋の幅広い交友が明らかにされている。遊歴中の作を中心に訓読も付して提示された采蘋の詩からは、原采蘋の漢詩人としての高い能力と魅力が伝わってくる。女性史の視点から論じられることの多い原采蘋であるが、従来の研究は限られた資料によるものであった。本論文は豊富な資料により、孝と自我に揺れる采蘋の内面世界に光をあて、男性詩人と伍して活躍した采蘋の隠された女性意識を解説した論文として高く評価できる。原資料によらないこれまでの研究を正しているところもこの論文の価値を高めている。本論文によって、原采蘋研究が大きく前進したと総括できる。

よって、ここに審査委員一同は、本論文が当該分野の研究に寄与するに十分な成果を挙げたものとして判断し、博士(総合社会文化)の学位を授与に値するものと認定する。

以 上

平成26年1月30日